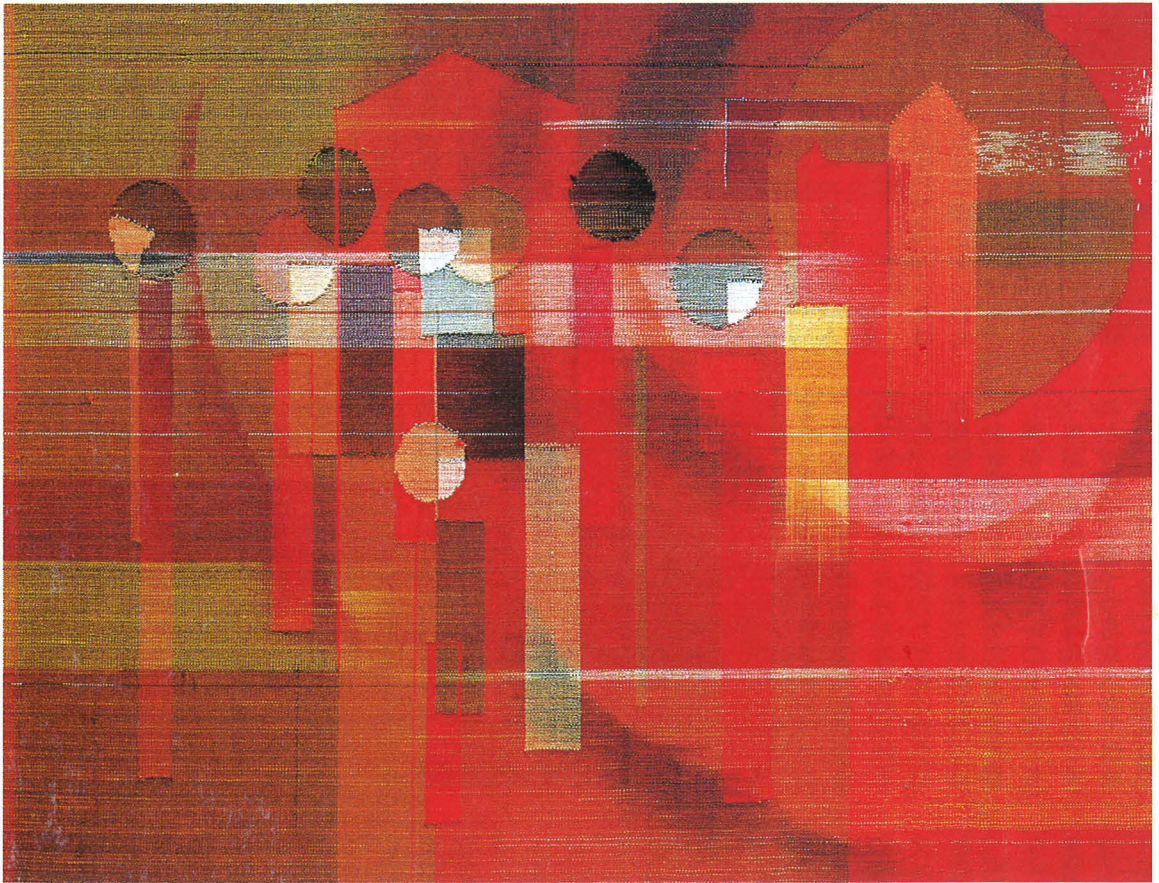


文化高知

'99年1月 NO.87



「ゆく日」山本眞壽

〈もくじ〉

お正月と年賀状	萩原孝弘	2
ミュージカル・ワークショップに取り組んで	小川美也子	3
情報生活維新を目指して～「KOCHI 2001 PLAN」の取り組み～	福田道則	4～5
アメリカに学ぶ食物文化と食事文化	中村雄一	6～7
高知職業能力開発短期大学の現状と課題(下)	鈴木堯士	8～9
満州(現中国東北部)苦難の一年(下)	島田美喜子	10～11
山はスキーに温泉・キノコ(1)～スキー登山の心①～	大森義彦	12
民俗雑記帖 5	梅野光興	13
風俗歳時記・風伯		14～15

(財) 高知市文化振興事業団

お正月と年賀状

荻原孝弘

一年の始まりは、お正月です。

元日の朝、お日の出を拝みますと身も心も洗われ、すがすがしい気持ちになります。仕事や学業の始まりは四月ですが、生活や暮らしの区切りは、今も昔もお正月です。

大晦日の除夜の鐘の音を聞きながら煩惱を払い、新しく迎える年を実に豊かで良き年であるようにと祈ります。お正月は、普段の生活を改めて振り返り、自分自身、家族、親戚友人、地域、社会との関わりを見つめ直して新たな思いでスタートする時節であります。

ふるさと倉敷の子どもの頃の思い出がありますが、お正月を迎える際には年棚を設け注連縄をし、年神さまに御神酒、お餅を供えて新年を迎えています。お正月の三箇日はお雑煮、七日は七草雑炊、十一日は餠汁、十四日はお粥を年神さまにお供えをし、一年中に食する物をすべて十四日間に供え新年のお祝いを行う

ていました。

そして、一月十四日には、門松注連縄、お飾りを下ろし、十五日には「どんど焼き」を行ってお正月を終えていきました。お正月の間には、寺社への初詣、年始、初売り、書初め、凧上げ、羽根つき、かるた、双六などのお正月風景、遊びが繰り広げられていました。

酒もすき餅もすきなり今朝の春
年玉をならべておくや枕許
子規
楸邨

たのしきらし我への賀状妻が読み
新年の祝賀の書状を送ることは、平安時代から行われていたといわれています。

年賀状が普及したのは、明治四一（一八七二）年に郵便の父である「前島密」が東京、大阪間に近代郵便制度を作り上げてからです。

明治六（一八七三）年に新たに「郵便はがき」が考案発行されてからは、手紙（封書）に比較し簡便なことからはがきを年賀に利用するようになり、年賀状が盛んになる契機となりました。

「お年玉つき」と「寄附金つき」の年賀はがきが発売されたのは、昭和二十四年十二月一日から発売した昭和二十五年用の年賀状からです。当時、年賀はがきは二円、寄附金つき年賀はがきは三元（寄附金一元）でした。年賀状にくじ番号をつけ、お正月に「お年玉」を贈り、さらに寄附金を社会事業に寄付して役立てるという世界に類例のない制度でした。ちなみに最初のお年玉の特等賞品は、「ミシン」「純毛洋服地」でした。平成十一年の一等賞品は、「デジタルビデオカメラ」「ワイドテレビ」「カーナビゲーション」などです。から時代の変化を感じます。

平成十一年用の年賀はがきは、全国で四十二億千五百万枚発売されました。地方版の絵入り年賀はがきは、高知県ではリニューアルされた「はりまや橋」です。グラフィックデザイナートの北村登志夫先生の原画です。四国四県は、三橋時代を迎えいずれも図柄は「橋」であり、香川県は「瀬戸大橋」、徳島県は「大鳴門橋」、

愛媛県は「しまなみ海道」です。我が「はりまや橋」は、距離は短くとも全国的に知名度抜群の由緒ある長い歴史を持つ名橋です。市民の皆さまから全国に向けてお正月に賀状を発信していただきました。

郵便局のお正月の最大の仕事は、元日の年賀状の配達です。職員はもとより大勢のアルバイトの応援を得て、各ご家庭、会社に一軒一軒お配りします。年賀状には、一年間の往来や無沙汰を旧知、新規の方々に真心こめて書かれた思いがこめられて



この年賀状の取扱いは、ふるさとで「年神さま」のお祭りをしている十四日に終わります。そして、年賀状のお年玉の抽選は、「どんど焼き」を行っていた十五日に行われます。皆さま方にとりまして平成十一年うさぎ年が飛躍となる良い年となります。おぎはらたかひろ・高知中央（郵便局長）

ミュージカル・ワークショップに 取り組んで…

小川美也子

高知市文化振興事業団のお招きで、三日間でミュージカルの一シーンを作るというワークショップをやらせていただきました。参加者は十六歳から三十九歳までの一般社会人と学生、半分は全くの未経験者です。三日間とは言っても全部で十時間ぐらいの中でどこまでやれるか——しかしやるからには一曲だけでなく二

三曲でストーリーも追えるものを経験させてあげたい——そう考えて選んだミュージカルが『コーラスライン』でした。

この作品はスターのバックで踊るダンサーのオーディションという形を借りて、それぞれのダンサー一人ひとりの悩み、生い立ち、夢、そして現実といった生き様を描いている作品です。プロドウェイで初演された際には、本物のダンサー二十人ほどを集めて、実際の各人の人生のストーリーを語ってもらい、そのエピソードをまとめたものが『コーラスライン』という作品になったのです。

そこで今回は単に歌や踊りを体験してもらおうだけでなく、高知市民版『コーラスライン』ができるのではないかと思ひ、演技課題を宿題に出しました。つまり、自分の実際の体験を必ずどこか一部に取り入れて



「なぜオーディションを受けに来たのか」を自己紹介するモノローグを作ってきたさい——というものです。最初の予定では、一日目に歌三曲、二日目に振付二曲とこの演技課題、三日目に全体の作り込みをしようと思っていたのですが、なんと二日目の土曜日が台風のため中止になってしまいい大ピンチ。日曜日は時間延長してもらったものの、モノローグの稽古をする時間は皆無になったので、こりやむなくカットかなと思ったのですが、その場面に来たら皆ためらうことなくスッとモノローグを語り出してくれました。しかもそれぞれ体験も入っているのです、なかなかおもしろい語りになり、これには私もうれしき驚きでした。

ミュージカルと言うと、どうしても歌や踊りという要素が目立りますが、もちろん歌や踊りのテクニッ

クは大事なことなのですが、その根本にある「気持ち」の核がないと単なるテクニクに終わってしまいます。ある場面の感情を表現するため、歌や踊りのテクニクを「手段」として用いるわけです。

そのためにはその役の背景や、その場面の感情の流れをキチンと把握して歌うなり踊るなりしなくてはならない——今回のワークショップではそのことをまず分かってほしいと思っ

てやらせていただきました。結果としては、そのことはかなり伝わったのではないかと思っっています。歌、踊り、セリフの技術の覚束ないところに留まっ

ていないので、これからもっと充実したオリジナルミュージカルが生まれてくる可能性を秘めていると思っ

情報生活維新を目指して

～「KOCHI 2001 PLAN」の取り組み～

福田道則

高知工科大を核に
産学官が連携で推進

高知県では、二十一世紀における新たな社会経済システムの構築に向けた、情報化によるマルチメディア社会実験として、昨年度から高知県情報生活維新「KOCHI 2001 PLAN」に取り組んでいます。二十一世紀を間近に控え、我が国は、経済活動の低迷と急速な高齢化の進展などの課題を抱え、社会経済システム全般にわたる変革が求められています。

本県が情報化で目指していることは、単に今までの社会経済システムの枠内で利便さや効率化を追求することではなく、地方から新たな産業のあり方や真に豊かなライフスタイルを提案し、距離や時間の壁を克服できる情報化の機能を活用して、自らこれを実現していくことにあります。

本県は、東京や大阪という大きいマーケットから遠く離れているという、主に産業面でのハンディキャップを抱えています。また、広い県土に人口の少ない過疎市町村が散在する一方で、県庁所在地の高知市に県人口の四〇％が集中しており、首都



高知県情報スーパーハイウェイの全線開通を記念して開催された「ネットワークビジョン'98秋」。近未来の社会を気軽に体験できるイベントに大勢の人が訪れた（高知市帯屋町のひろめ市場）

圏に一極集中した日本の国土構造と似通っています。さらに、六十五歳以上の高齢者が人口に占める割合は、全国で第二位の高齢化の先行県であり、将来の日本の姿を先取りしています。

このような高知県の抱える様々な課題を情報化によって解決できれば、地方の新しい施策の方向を示すこと

ができるのではないかと。こうした理念や思いを「情報生活維新」として提示し、先進的で全国モデルとなる十のプロジェクトを「KOCHI 2001 PLAN」として取りまとめ、一九九七年から二〇〇一年までの五年計画で、公設民営の高知工科大学を核にした産学官の連携のもとに推進しています。

福祉サービスの向上 教育の充実等を目指す

このプランのバックボーンとなる情報通信インフラが、最先端の技術を活用した高速大容量の高知県情報スーパーハイウェイです。このネットワークは、一つの回線上で保健・医療・福祉や教育などの様々なアプリケーションを提供することができ、全国の初の全県的なネットワークです。

昨年十一月から、県内全域から三分十秒でこのネットワークにアクセスすることができるようになり、県内どこからでも格差なく、公共情報や公共サービスが受けられる情報通信環境が整備されました。

このネットワークを活用して、保健・医療・福祉サービスの向上や教育の充実、産業の振興等を図っていきたくと考えています。

特に、教育の分野では、本年度中に県下の公立のすべての小中高校がインターネットに接続できる環境が整いますので、文字を自由に読み書きできる能力を養うのと同じような意味合いで、子どもたちのコンピュータの活用能力を向上させたいと考えています。

さらに、高知県における情報化のすそ野を拡げていくために、市民活動グループや企業、起業家等がこのネットワークを一年間無料で活用してもらい、ネットワーク文化や新規産業の創出を図るネットワークインキュベータ事業を展開しています。

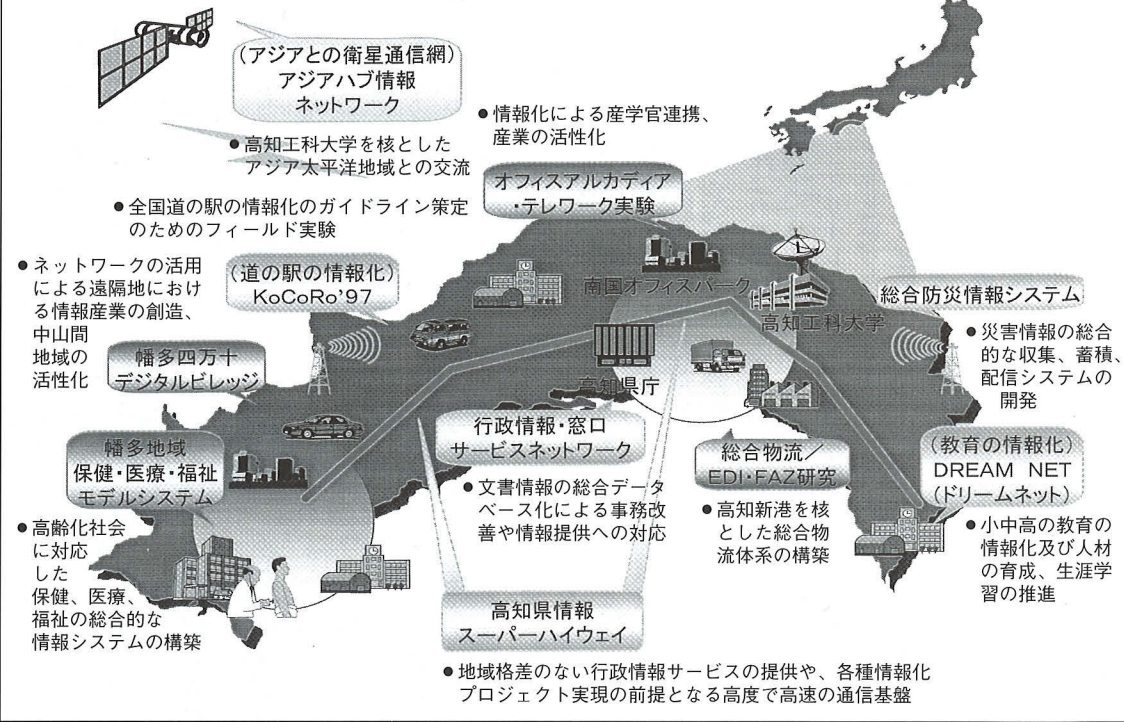
現在公募で採択された五十三のプランが、昨年十一月から順次実施されており、九十六にのぼる多数の企業や団体が、ハイウェイを活用した実験研究に取り組んでいます。その中間成果の発表会を、去る十月三十日から十一月一日まで高知市の「ひろめ市場」の特設会場で開催しました。

また、実験研究の成果や情報化のメリットを十分に発揮するためには、人と人とが直接対面することを前提とする現在の社会経済システムでは対応できない規制緩和を必要とする事例も出て来ることが予想されます。

そのような提言も行いながら、今まで以上にプロジェクト間の横断的な取り組みを進め、ネットワーク時代の新しい地域づくりや豊かなライフスタイルの実現を目指していきたいと考えています。

（ふくだみちのり・高知県情報企画課プロジェクト推進班長）

KOCHI2001PLAN実験展開イメージ

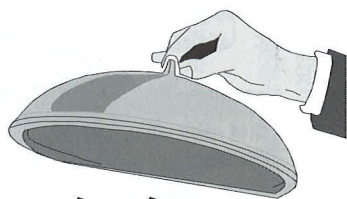


スピードある変化と革新が成功を生む

毎年、アメリカへは二〜三回行ってきます。目的は、スーパーマーケット、百貨店、専門店等の小売業界とレストラン業界を定点定時観測することによって、現在が去年あるいは三年前と比較してどう変化しているのか、また、その激しさを実体験し発見することなのです。

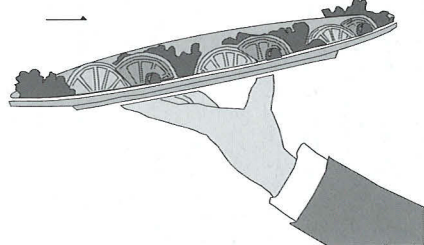
そんな二十年間の経験から、日本は小売分野では十年、レストラン分野では十〜十五年遅れているように感じています。アメリカで起こった業態（新しいタイプの店舗）が数年後には日本、特に東京、大阪の大都市周辺に出現する例が多いことを見ても明らかです。戦後生まれの漢字では表現できないスーパー、コンビニエンス・ストア、ファミリーレストラン、ファーストフードといった業態はすべてアメリカ生まれの店なのです。

しかし、アメリカ流そっくりが成功しない場合も当然あります。失敗の例もたくさん見て来ましたが、私は、その新業態が日本の大衆に受け入れられるかどうかは、常に日本の大衆



アメリカに学ぶ 食物文化と 食事文化

中村雄一



のライフスタイルの変化を見続けながら、「こんな商品やサービスや雰囲気を提供できる店が望まれているのでは」と、まず仮説を立てることから始まると考えています。そして、自分で立てた仮説が熟成していく過程と平行して、アメリカで多くの実例を見、日本流に修正しながら進めることが私の場合多いようです。成功のためには常に仮説が必要であって、下手な鉄砲、数打ちや当たる

ではビジネスにはなりません。とにかく、アメリカのビジネス変化は日本やヨーロッパに比べて質量ともに大きいし、早いのです。政治の世界も同様に思います。しかし、なぜアメリカがそうなのか、また、そうでないと生き残れないのかの疑問は、日本とアメリカを往復し店を

視察してもその答えはなかなか見つかりません。しかし、その解決のためのヒントがある雑誌に掲載されていたので引用させていただきます。

難問に直面した時、一般にアメリカ人は「変化」を求め局面打開に果敢に挑む。これに対し、日本人は我慢の姿勢を貫き時の流れに解決を委ねる。微調整、継続性という言葉が好きで変化や断絶に恐れおののく。今日あるように明日もありたいと願う。

まさに自分の夢を実現すべく、現地を求めた西部開拓魂を下地に、現代におけるアメリカンドリームに必要なコンセプトは、「スピードのある変化、革新なくして成功はあり得ない」ということでしょう。



日本でも出店が増えた「スターバックス コーヒー ショップ」の外観。世界に約1,700店を展開している

れる分野（政治、経済）においては、日本独自の価値観を主張することは難しくなっていくからです。

以上のようなことが私のアメリカ詣での理由ですが、そんな中で私にとって一番関係深い「食」について考えてみたいと思います。

心満たされる

「食事文化」の時代へ

人間が「生きる」ために最低限必

要な衣・食・住のライフスタイルの変化を長い歴史で見ると、私は一番変化していない分野は「食」だと思います。「衣」は太古の昔のパンツ一枚からスーツへ、「住」は竪穴式住居からテレビ・空調付き住居へと大変革が起こったことは見ての通りです。しかし、「食」は昔からその地域独自の地理的、気象的な自然条件によって適当とされた食べ物を、生命維持から病気予防と健康増進へとその目的は変化させながらも、昔

ながらの食べ物を私達は営々と取り続けています。

肉、魚、野菜、穀物等を食べることにおいては「衣」「住」のような大改革は起こっていません。例えば日本人にとって、大昔も主食は米であり、今もそうなのです。世界には、中国、インド、フランス、イタリア、ロシア料理等々その国独自の料理があり、各々がその国民に最も人気のある食べ物であることは今も昔も同様でしょう。このことから、「食」ほど保守的なライフスタイルはないと思います。そして、「食」こそが世界各国の長い長い歴史から生まれた独特の文化の象徴であると言えると思います。

では、アメリカには独自の料理、つまりアメリカ料理といったものがあるのでしょうか。いろんな人に質問しても即答はなく、「ウーン」と言っただけのあげく、「ハンバーガー」か「ポーク&ビーンズ（西部劇でよく観るカウボーイ料理）」という答えが返ってきます。実はアメリカにも「おふくろの味」という料理があるにはある。しかし、それがアメリカ料理と言われるまでには世界的に公認されていないだけなのです。それでは、評価される料理を有しないアメリカにおいて「食」の文化

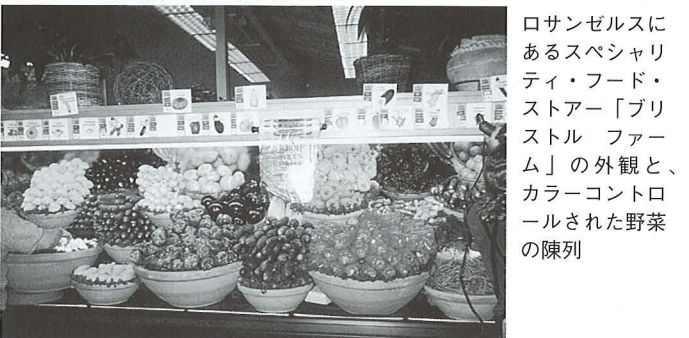
また、人間一人ひとりの内面的な変化だけでなく、住む場所も町そのものをも大きく変えるのは、アメリカです。多くのアメリカ人は、より良い生活の実現のために生まれ故郷を離れることや転職することには何のためらいもありません。従って、彼らは住む場所をよく変える。つまり、収入が良くなればそれなりの地域と家そのものを求めて移っていくのです。

このようなアメリカ型ライフスタイルとは異なる生まれ故郷重視生活（盆、暮れの帰省旅行に顕著）、終身雇用職業観等に見られる日本社会は、今後はアメリカナイズされていくことと思います。なぜなら、特にグローバルスタンダードの必要性を問われ

とは何なのか。私は、それは「食事の文化」ではないかと思っています。料理された食べ物「FOOD」そのものではなく、「食事を楽しむ」ための仕掛け、環境と食べ物「食事」がアメリカの食文化であると思います。ダイニングルームの照明、カーテン、白、時には花柄のテーブルクロス、そしてローソクの灯り。コーディネートされた食器やBGM等によって「美味しさ」の演出がなされた場面において料理を食べる。このことの全体が「食事」であり、それがアメリカの食文化なのだと思います。日本においても「食べ物を食べる」時はファーストフードを利用し、「食事を楽しむ」時にはダイナーレストランや手を入れた家庭の味を楽しむという動機ごとの食生活が段々と定着してきたことも食事の文化の深化した現象でしょう。

「食」の目的が、生命の維持から健康でありたいという欲望を満たすためへと変化し続けていることは、世界の文明国の共通の現象です。日本の「食」が、物によって腹が満たされる時代から「食事」によって心が満たされる時代へと大きく変化していると感じている最近です。

（なかむらゆういち・柳サニ）
マート代表取締役



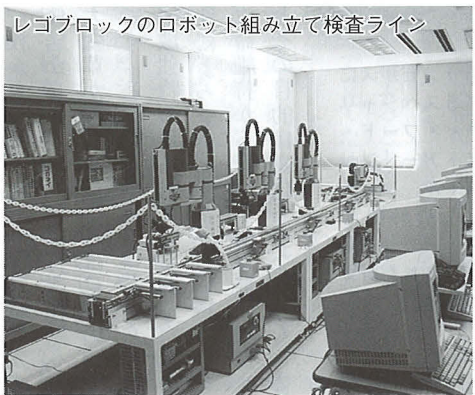
に「フレッシュ」の野菜を陳列する。アメリカのスーパーマーケット「ブルースタッフ」の外観と店内の様子。

高知職業能力開発短期大学の現状と課題（下）

鈴木堯士

多彩な職業能力開発事業

当短大では、団体・事業主および労働者に対して職業能力開発事業を数多く実施しています。その第一に、人材高度化支援事業があります。産業界構造の変化に対応して、製品の高付加価値化や事業の新分野を担える人材の育成を推進する事業主団体を、本校と高知雇用促進センター・ポリテクセンター高知の三施設が一体となって支援しています。生涯能力開発体系図を共同で作成し、職務に必要な能力開発セミナーを本校で年間百五十件近く実施しています。しかし、この能力開発セミナーは雇用促進事業団業務の主要な柱であり、平日の夜間や土曜・日曜を使って実施しますので、教員の負担が大きく、悩みもあります。



レゴブロックのロボット組み立て検査ライン

第二に、今年度から、構成事業主が自ら従業員教育を実施できる「リーダー養成コース」を開設しています。この講座は、教育訓練計画・指導方法・教材作成・安全教育など内容としていきますので、事業主から大いに期待されています。第三は、事業主団体研究開発事業

として、団体などからの要望により、能力開発支援を実施する一方、高知県内の産学官の研究・開発プロジェクトに参画し、研究開発の支援を行うとともに、技術支援にかかわるセミナーも実施しております。昨年二月には、高知工科大学で「高知県内機械系教育研究部内情報交換会」が開催され、本校・工科大のほか、高知高専の教員も参加し、極めて有益な情報交換ができました。その中から、共同研究の道が開かれ、機械系以外の学科の集まりも実現できるのではないかと期待しております。

第四に、事業主や事業主団体に対して、人材高度化ならびに高度技能活用雇用安定事業にかかわる助成金・給付金・奨励金給付のお手伝いをしております。給付そのものは、高知雇用促進センターが取り扱っておりますが、当短大はその支援・援助

助を行っています。その他にも、施設の有効活用を図るために、本校の垣根を低くして、施設設備・機器・図書・体育施設などを団体・事業主および地域の方々に開放しています。特に、広大なグラウンドの使用頻度は年々増加しており、地域住民との接触も密になりつつあります。赴任当時は、文部省と労働省のシステムの違いが大き過ぎ、戸惑うことも多くありました。高知大学時代には予想もしなかった保安面での対策も万全で、毎月一回必ず施設安全衛生会議を開催し、校内の安全パトロールを実施しています。工科系の大学校であるため、大規模な機器類が多く、ちょっとした油断が事故につながる可能性もあり、保安対策には特に気をつけています。機器類の点検には十分な対策を講じ、幸い今日まで無事故を続けています。

事業団再編等の課題も

しかし、課題もいくつかあります。その第一は、雇用促進事業団の再編問題です。行政改革への動きが急速になっている中で、一昨年三月、自由民主党行政改革推進本部は、「特殊法人等の整理合理化（第一次分）

について」を発表しましたが、その中で雇用促進事業団については、「平成十一年の通常国会において法律改正を行い、廃止する。職業能力開発関連業務、中小企業の人材確保等事業主支援業務および勤労者財産形成促進事業については、業務内容を精査したうえで、新たに設立する法

人に移管する」としています。当短大も新しく設立される法人の下に移管され、平成十一年から再スタートすることになります。存続は決定したものの学科の改組等も予想され、課題が残ります。その一方で、全国をいくつかのブロックに分け、短期大学の専門課程（二年）の上

に適用課程（二年）が構築され、大学校へ移行することも決まりました。平成十一年には、手始めに東京・大阪・北九州・沖縄の短大が大学校化され、短大の卒業生にも進学の道が開けることになりました。

第二に、学生応募者が減少傾向にあることです。少子化現象とともに高知工科大学や香川大

以上述べてきましたように、いくつかの課題も残りますが、当短大は今後とも職業能力開発事業を通じて、新しいものづくりを目指し、地域社会の発展に貢献できるよう努力する覚悟でおります。

地域社会の発展に努力

第四は、教員の業務負担増の問題です。教員は前述したように講義・実験・実習を担当するほか、卒業研究の指導、能力開発セミナーの開講、就職斡旋の業務等極めて多忙で、健康面からも心配が出てきています。

キャンパス内にある学生寮の全景



本校の学生には実践技術者を目指し、意欲的・積極的に、日々努力を怠らないことを要望しています。日々の研鑽・実践こそが実践技術者への唯一の道だからです。

当短大は、創立からまだ四年目を過ぎたばかりで、知名度はまだまだまだだと思います。実践技術者として産業界で活躍しようとする強い意欲と情熱を持つ若人が本校に集われることを心から望んでおります。

すずきたかし・高知職業能力開発短期大学校長・高知大学名誉教授

コンピュータを使っている実習風景



満州(現中国東北部)苦難の一年(下)

島田美喜子

発疹チフスが発生

寒い中で大変なことが起こった。発疹チフスの発生である。シラミが病原菌を持って伝染するもので、高熱が続く約一週間で死んでしまう恐ろしい病気であった。

着替えもなく、風呂にも入らない毎日でシラミは皆の中に蔓延していた。それは取っても取っても減ることはなく、痒いという感覚も通り越していった。医者も薬も無い中で次々



と病人が出ては死んでいった。

初めはネグ板で棺を作って葬っていたが、次第にアンペラで巻いたりして、最後の方はそのまま雪の中に埋めるしかなかった。誰もがいつ自分の番が来るかと不安で、恐怖にお

ののいていた。私も父母宛に遺書を書いた。

何とかしてシラミを退治しなければと、皆の着ている衣類を釜でグツグツ煮たのであった。白い下着も赤い服も黒一色となってしまった。翌朝その釜で炊いたコーリヤンの粥は黒ずんでいたように思った。

衣類のシラミはいなくなったが、頭の髪にいたシラミは次々と卵を産みつけて退治するのがむずかしかった。そこで仕方なく女も男もみんな丸坊主になってしまった。悲しかったが命には代えられない。バリカンなどのある筈はなく、鋏でしかも握り鋏で刈ったものだから、見事なトラ刈り頭になったが笑いごとではなかった。結果チフスは食い止めることができた。またソ連兵から逃れる男装の役目もした。

運命の出会い

連日のように厳しく窓を打っていた吹雪も少しずつ鳴りをひそめ、長かった冬も終わってひたすらに待ち続けてきた春の気配が訪れた。新京の春は早いという。日本へ帰れるかもしれないという浮き立つような気持ちとは裏腹に、体の弱い私はやせ細り下痢が止まらなくなった。

「ああもう駄目か」と弱気を出したが「このままここで死ぬのは嫌だ。どうしても帰らねばならない」と思いつつも手紙を書き残した。この悲しみのどん底の時のことであつた。寮の廊下で行きずりに「小田さんじゃない」と私の旧姓で呼びかける人がいた。「エエツ」と振り返ったが、顔を黒く塗り男装をしていて分からなかった。「私、A子よ」と言ってくれた。何とその人は小学校の同級生のA子さんであつた。彼女は日頃はこの寮の近くの社宅に住んでいるのだが、ソ連兵の危険から避難して、大勢人のいるこの寮と自宅との間を行ったり来たりしていたのであつた。正に「地獄で仏」とはこのことで、早速家に連れて行ってくださった。

彼女の家は何の被害もなく、敗戦前は新聞社へ勤めていたというご主人と小さなお子さんの二人で快く迎えてくださった。そして温かい白いご飯や薬など、それに衣類もたくさん頂いて、私は生き返ったような思いにただただ感謝の涙にくれるばかりであつた。貰った足袋は先ずほどこいて厚紙でその型をとり、空き部屋のカーテンで足袋を縫った。型紙を利用して皆の足袋ができて喜んでくれた。

あの時、私はA子さんに出会って助けていただいたお蔭で生きて日本へ帰ることができた。けれども命の恩人A子さんは帰国して一年も経たないうちに結核で亡くなってしまった。余りにも悲しい運命であつた。もともと永くご恩返しをしたかったのに申し訳なく残念でたまらなかつた。

待ちかねた春

待ちに待った本格的な春がやって

来た。池の水もゆるみ、雪と氷に閉ざされていた草原には、あやめ、芍薬、百合等の花が一齐に咲き出した。春になると日本へ帰れるという噂で心はもう遥か日本へ飛んでいた。敗戦後、途絶えていた交通も復活して人の往来ができてきた。心配していた夫の消息も分かり、やっとのことで連絡がとれて緑園へ来ることができた。

そして待ちかねていた引き揚げの知らせが入った。躍り上がって喜んだ。嬉しくて嬉しくていろいろの思いが入り乱れて夜も眠れなかつた。日本へ帰れるこの日をどれだけ待っていたことであらうか。

けれども「帰りたい、帰りたい」と夢の中でまで言いながら無念の最後を遂げて、生きて帰れない人のことを思うと、私たちが無事で帰るのが申し訳なく、どうしようもない思いに胸はいっぱいになり、涙は溢れるばかりであつた。そのことは今も忘れることはできない。

夢にまで見た故郷へ

まずコ口島でアメリカ兵の厳しい検閲があつた。「刃物と書類は絶対持って帰ってはならない。もし一人でも違反するものがあれば中隊全員

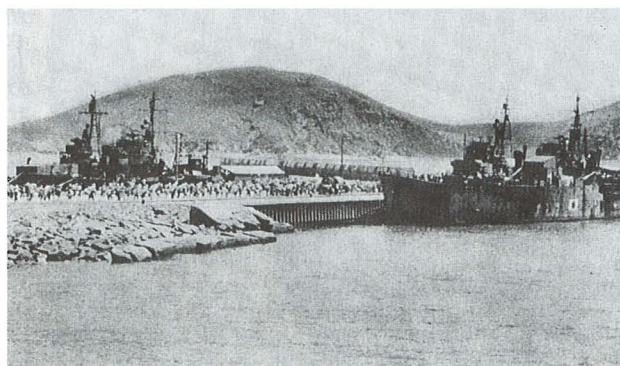
(二百人ぐらい)が乗船できない」と持ち物は全部調べられた。帰還船を前にして自分のために人に迷惑をかけてはと、みんな書類などどんどん燃やしていた。刃物は鋏まで取り上げられた。私は一年間の毎日の様子をつぶさに綴った日記帳を仕方なく泣きながら燃やしてしまった。あの日記帳があればと今でも本当に残念でたまらない。

検査や検疫も終わりやっとな乗船することになった。引き揚げ船は鉄板で造られた戦闘用のものらしかった。船室はすし詰め状態で、小さな丸窓があるだけで、まるで蒸し風呂のようである。甲板に出れば鉄板は焼け付くようであつた。食事は乾パン五、六個と水だけで、苦しかったが日本へ帰れることを心の支えに、何とか耐えることができた。

そして、すぐそこに日本本土が見えてきた博多沖で、今度はコレラの検査といつて上陸することができなかった。この状態で八月の猛暑の中を一カ月間も船に閉じ込められたことは、最後の苦しい辛い思い出となつた。ここまで生き延びてきたのに、なつかしい日本を目の前にして、この船上で亡くなられた方もたくさんいた。その無念さはいかばかりだつ

たであらう。

やっとな検査が終わって船が動き出した。行く先は佐世保だつた。日本のみどり美しい島の間を船は縫うように進んでいく。「ああ、やっとな日本へ帰ってきた。生きて帰ることができた。夢にまで見た故郷へ、本当



コ口島での引き揚げ団の乗船風景

(「鶏助の記」より)

に帰ってきたのだ」と感無量になり、嬉し涙は頬を伝い、大きな声で泣き叫びたい、張り裂けんばかりの気持ちをやっとな抑えた。

一九四六(昭和二十一年)八月二十三日のことであつた。

(しまだみきこ・主婦)

氷点下30度にもなる冬の新京(現長春)の大同大街 (望郷「満洲」より)



山はスキーに温泉・キノコ (1)

スキー登山の心

①



大森義彦

一月・二月はスキー、三・四・五月はスキー登山と山菜採り、七月・八月は海や川遊びに沢登り、九・十・十一月とキノコ、十二月も半ばになればスキーシーズン到来という具合で、梅雨時以外それぞれの季節がそれぞれに楽しい。

春が来れば心が浮き浮きして、やっぱり春が最高だと思ひ、夏が来れば夏の解放感も素晴らしいと感じ、秋が来ればキノコが一番と喜び、冬になればスキーほど楽しいスポーツはないとばかりそれに打ち興じる。

初夏の兆しを感じられるころになると、「残念、今年のお山スキーもこれで終わるか。早く来シーズンが来ないかな」と思う。山に雪が降るころになると、「キノコもこれが最後。来年が待ち遠しい」と思う。特に新しい場所を発見した場合は、翌年の生え具合を空想して早くその光景を

目にしたという気になる。けれども一方では、「そんなに早く一年がたってしまったのは困る」という気持ちも強い。来たるべき楽しみが多いというのも、考えものだ。

梅雨期は休養期間でそれ以外はみんな好き、なかならず山スキーと温泉巡りとキノコ採りが大好き。遊んでばかりと思われそうだが、そんな自分は自称アウトドアならぬアバウトドア派ということにしている。

山スキーも温泉巡りもキノコ採りも、打ち興じている時が一番幸せなのは言うまでもない。ロマンを求めるとなにかの冒険心が満たされる。加えて、後でその時の出来事や思い出、見ず知らずの人とのひとときの触れ合いなどを折にふれて文章にすることもまた楽しい。するとさらに新たな夢が湧いてくる。
旧制高知高等学校の寮歌に「感激

なき人生は空虚なり」という一節がある。困難なコースのスキー登山を成功させた時や、大量のマイタケやナメコを新発見した時は感動ものがある。生きていくことの喜びと嬉しさを感じる。いろんな生きがいがある。僕にとってはそういうものが生きがいの主要な一つになっている。そんな楽しみ方の一端をこれからいくつか紹介したい。まず最初はスキー登山である。

イタリアは北国

イタリアといえば南国というイメージがある。太陽の国イタリアというわけだ。だからイタリアへスキーに行くと言ったと怪訝な顔をする人がいる。だがちよつとここで世界地図を見てみよう。すると驚くことに、イタリアではむしろ南部に属するローマでさえ、北緯四十二度もあることが分かる。ほとんど札幌の緯度なのだ。ついでに高知は三十三度である。本当はイタリアは北国であると言わなければならないことになる。

ヨーロッパのアルプスといえば、マッターホルンやモンブランなどが真っ先に思い浮かぶが、マッターホルンは実はイタリアとスイスの国境の山であり、モンブランはイタリア



イタリア国内最高峰・グランパラディソ

僕は一人残ってイタリア・スイス国境の山々を滑りまくった。次回はイタリアからスイス、そしてまたスイスをまたいだ話を紹介しよう。

（おもしろよしひこ・高知大学 教育学部教授）

民俗雑記帖5 時間論

梅野光興

先日東京に行つて電車に乗ると、ある車内広告が目に入った。

女性タレントの顔が二枚プリントから打ち出されている。左側は半分しか顔が見えていないが、右の方は女性の顔が全部見えている。「2倍はやく〇〇〇〇に会えます」とある。どうやら、従来の機種より打ち出し

が速くなったことをアピールしているようだ。ご丁寧にまだ打ち出し途中の方には「おそい」、全部見えている方には「はやい」と注記までしてある。

これまでの機種がどれほど遅かったかは知らないが、何もそんなに急がなくても、とつい思ってしまう。確かに昭和三十年代以降、電気洗濯機や車の普及によつて、私たちの生活は早く、楽で、便利になった。そのことは必ずしも悪いことではない。だが、一通りの便利さを手に入れてしまった現在では、わずかなスピード競争や、過剰な便利さを追及することが、逆に私たちが何となく気ぜわしく、疲れさせてしまっている。そんな気がする。

そういえば最近、正月が正月らしくないように思われる。大晦日や元旦の改まった気分や、三が日のゆつ

たりした時間など、正月の「空気」でもいうようなものがある感じがたれなくなっているのである。

民俗学者によると、正月は、宇宙の秩序が更新される時であった。元旦の朝早く井戸や川から水を汲み、その水で顔を洗ったり、お茶にして飲んだりする若水汲みという行事がある。「若水」という名前から分かるように、この水は、飲み、肌につけることで若返る生命の水であった。沖繩では夏の若水の行事があり、これをステイ水などと呼んでいる。スデルとは蛇が脱皮をするように新しく生まれ出る意味であり、不老不死の水であった。かつて正月には皆が一齐に年を取ったわけだが、よみがえる、リフレッシュするという反対の意味もあつたのである。

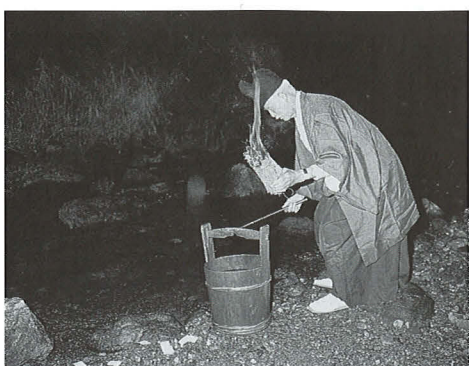
ある時間が経つと再生して元に戻るといふ時間は、世の中はだんだん便利になつていく、進歩していくといふ直線的な時間の観念に対して、円環的な時間と言えるだろう。一年のサイクルだけでなく、人間の一生も、誕生、結婚、死、そして再生という円環的な時間で考えられていた。一年や人生の節目には行事や儀礼があつて、日常生活の慌ただしさから解放される機会になつてきた。正月などのゆつたりした安らぎの時間に、

人々は休み、癒され、次の段階に備える力を養っていたのである。現在歴史館で開催中（一月十七日まで）の『昔のくらしと道具』展の調査で、大津の人に話を聞いたときも、二期作農業の忙しさに驚くとともに、田植えのあとの休暇や冬の遊び（網打ちやシャモの喧嘩や競馬）の楽しそうな様子を伺つて、ちよつとすらやましく思つたものだ。昔の生活は今よりもメリハリがはつきりしてリズムがあつたようである。

もつとも現在では個人個人が思い通りに旅行や遊びを行つて、正月や田植え休みのような機会はありません。要がなくなつてきているのかもしれない。しかし、社会全体が忙しくなつて今、ともすれば遊びの世界も時間に追われ、急がされがちである。私たちの生活が何となく疲れていることと、正月が希薄になつてきていることは、無関係ではあるまい。

FAX、パソコン・携帯電話…、世の中はどんどん便利になつていく。しかし、生活のテンポアップが心のゆとりを奪つていくという側面はないだろうか。直線的な時間だけでなく、円環的な時間の再生が今求められているように思われる。

（うめのみつおき・高知県立歴史民俗資料館主任学芸員）



若水汲み（高知県東津野村船戸）



散歩の途中で

升形の出雲大社土佐分祠内に、祭神である大国主神を仰ぐように一匹のウサギがぴょこんと立っている。平成大不況の中、景気回復をウサギの跳躍力に期待してだろうか、頭を優しく撫でていかれる方も多いという。

昨年末には、景気の先行きについて「極めて厳しい状況だが、変化の胎動も感じられる」との見方も出た。今年はまさにウサギ年。不況のハードルをぴょんぴょんと飛び越え、景気が回復していく一年になることを期待したい。

風俗

あえか 繊弱なる音

雪が降り落ちる音だったのだ。それは雪がささやきかけるような繊細な響きで、擬声語として文字や言葉に置き換えるのは不可能だった。

丁度その時期に舟橋聖一氏から源氏物語の講義を受けていたが、その中の「あえか」という形容こそがこいつの音かと思った。

新宿区内の神田川にほど近い民家の二階が学生時代の下宿だった。二年目の冬となった底冷えのする一月の深夜、音ともいえないほど幽かなそして不思議な気配を耳にしたのがそこでのことだ。窓を開くと雪になっていた。

気配の正体は窓のすぐ下のトタン屋根に

雪の珍しい南国育ちは寒さも忘れ、窓から顔を突き出したまま長い時間聞き入っていた。

数年後の暑い夏の日、高知市の中心部で老朽木造住宅が密集したひろめ屋敷の中の一軒を、社会福祉担当者の一人として訪れた。

摺り切れた古畳の上でその家の主と対面してから数瞬後、忘れもしないあのあえかにも幽かな音を再び聞いた。幻聴かと疑いながら足下をよく見た途端、顔から血の気が引くのが判った。四方の畳一面から無数の蚤が飛び跳ねて押し寄せて来る。こちらの正体は何百匹かの蚤が畳を蹴るとき音だったのだ。

私の顔色に気付いた相手が平然と言った。「蚤も家主は知っちゃううきにフシには滅相だからんけど、たまの客が珍しいがよ」

最新の鏡光スポットに変貌を遂げたひろめ市場の華やいだ一劃で、私の耳に二つの、あのあえかにも幽かな音が蘇ってくる。

(南北)

第9回 高知出版学術賞 推薦募集

「高知出版学術賞」は、当該年度における最も優れた学術出版物を顕彰することによって、学術研究の振興を図ることを目的とした賞です。該当図書について、皆様のご推薦をお待ちします。

【対象】

次の事項をみたすもので、高知出版学術賞審査委員会に推薦されたもの。

①高知県内に在住する者の学術的著述、または他県在住者で高知県に関する事項をテーマにした学術的著述。

②1998年中（奥付の日付による）に発行された単行本。

【推薦】

自薦・他薦を問いません。必要事項を記入した所定の推薦書に、該当図書2部を添え、審査委員会まで提出して下さい（図書は返却しない）。なお、推薦書は請求下さればお送りします。

【受付期間】

平成10年12月10日(木)～
平成11年1月29日(金)

【表彰】

3点以内とし、それぞれの著者または編者に賞状と賞金10万円を贈ります。

【推薦・お問い合わせ】

文化振興事業団内
高知出版学術賞審査委員会

今号の表紙

「ゆく日」 山本眞壽

今日よりも、もっと輝く明日がある。そんな気持ちで、デッサンを元にして機織りの仕事をしました。おかいこ様と呼ばれて、大切に育てられたマユからできる絹糸を素材とし、摘み取った花や草木で染色しました。

明日に向けての息づかいのようなものを感じていただければ幸いです。

(やまもとます・日展会友)



高知を撮る 水あびせ (平成10年 大月町) 山田開久

第14回写真コンテスト入賞作品

1月2日、大月町春日神社での「水かけ祭り」の一コマ。塩水をかぶっても構わない覚悟で、正面から絞りを開け、ノーフラッシュでトライ。満足できる一枚に仕上がった。

「家族のかかりつけの医師である。「家庭医」とも言う。」

本家の英国では「ファミリードクター」と呼ばれるが、日本ではお得意の和製英語で「ホームドクター」と言うこともある。

厚生省の新構想によると、この英国の医療制度を導入して、普通によくある病気の診療や、家族の持続的な健康管理などは、かかりつけ医が担当し、必要に応じて専門医を紹介する、ということになる。

平成十二年四月から実施される「介護保険制度」では、介護支援専門員（ケアマネジャー）による第一次認定（訪問調査）に続いて、かかりつけ医が、「介護が必要かどうか」、「どの程度の介護が必要か」という意見書を提出して、第二次認定を行うことになっている。

かかりつけ医の存在が益々重要になってくる訳だ。

英国では、薬局や図書館などに備える「一般医」の診療所のリストがある。

かかりつけ医



風俗歳時記

遅まきながら、昨年十月、高知医大に「総合診療部」が新設されたのは喜ばしい。高知新聞によれば、「患者の家族や地域環境などの背景も視野に入れ、患者を総合的に診る」医師を育てる方針という。

(朴)

医を指名して紹介してくれる。

「一、説明が丁寧で、分からないことは正直に「分からぬ」と言う。

「一、検査や薬がやたらに多くない。

「一、往診にも応じてくれ、病態によっては夜間の急患も診てくれる。

「一、分らないときや、自分の手に負えないとき、無理に診療を続けなくて、良い専門医を紹介してくれる。

「一、患者の話をよく聴く。

「一、地区で長い間評判がいい。

「一、現代の医療水準で診療できる。

「一、住居の近くにある診療所を選んで登録することが多い。

「一、幸いにして、日本では、医師選択の自由が、より大幅に認められている。

「一、諸書が挙げられている、良い家庭医の条件をまとめてみよう。

第4回高知市民ミュージカル

ミュージカル

「光の中で…」 出演者募集

●ミュージカル・スクール募集要項

[募集対象]

15歳以上(1999年1月1日現在、中学生は除く)で、各レッスンに参加できる方。

* 演劇・ダンス・歌唱等の経験は問いません。

[募集人数]

100人(応募者多数の場合、書類選考を行うことがあります)

[スクール日程]

2月16日(火)・2月23日(火)・3月2日(火)

3月6日(土)・3月7日(日)

オーディション 3月9日(火)・10日(休)

[参加費] 5,000円

[募集期間]

1999(平成11)年1月31日(日)締切

※郵送の場合当日消印有効

[応募方法]

市販の履歴書に写真1点を添付して郵送または持参のこと。
※18歳未満の方は保護者の方の同意が必要です。

便箋等にミュージカル・スクールへの参加に同意する旨の文に、保護者の署名・捺印したものを履歴書と同封して下さい。

●オーディション

ミュージカル・スクール最終日にオーディションを行い、ミュージカル『光の中で…』の出演者を決定します。ただし、次の日程の練習・公演に参加できる方に限ります。

●練習 1999年3月19日から週2回火・金曜日〔予定〕
その他に追加のレッスンが入る場合があります。●公演 1999年10月14日(休)・15日(金) リハーサル
16日(土)・17日(日) 本公演[問い合わせ・申込先] 高知市文化振興事業団 高知市民ミュージカル係
〒780-0870 高知市本町5-2-3 Tel & Fax : 0888-73-4365
E-mail: bunshin@mail.i-kochi.or.jp

[主催] (財)高知市文化振興事業団・高知県立県民文化ホール(高知県文化財団)

新刊

やっさんの
わくわく動物記

中西 安男 著

A5判・並製本・192頁

本体価格 1,800円



カモシカ、ムササビ、ハクビシンなど私たちの日常生活の中でちょっと気をつければ出合える野生動物たちやアニマルランドの仲間たちの生態や習性・個性が著者の目を通していきいきと描かれる。読みものとしておもしろいだけでなく手軽な動物ガイドブックとしても最適、野生動物がさらに身近なものとなってくる。